

第9回 MAJESTy セミナー 実施報告

「医療を崩壊させないために」

(講演者: 虎の門病院泌尿器科部長 小松秀樹氏)



小松秀樹先生は、第一線中核病院の泌尿器科部長という、現役の医師でありながら、『慈恵医大青戸病院事件 医療の構造と実践的倫理』『医療崩壊「立ち去り型サボタージュ」とは何か』、最近では『医療の限界』という本を著し、今、日本の医療には何が起きているのか、を鋭く指摘し、進行しつつある日本の「医療崩壊」に警告を発した。今年になってテレビ、新聞、雑誌で「医療崩壊」に関する特集や記事が急増したのも氏のこれらの著書に端を発している。科学技術コミュニケーションの中で医学医療が社会にどのように伝えられ、どのような「世論」が形成されるのか、は人々の公共財である医学医療の行方を決しかねない重要な問題である。また医療の重装備化・高度化による医療費高騰はどの先進国も抱える問題であり、医療費・医療制度問題をどのように乗り切るのかが政治焦点のひとつともなっている。

講演は、以下タイトルによるレジュメに沿って行なわれ、氏の率直、明快で真摯な人柄が直接聴衆に伝わってくる内容であった。1.医療崩壊 2. 死生観と医療 3.不確実性の許容 4.議論の基本的態度 5.言語論理体系の齟齬 6.刑事司法の問題 7.メディアの問題 8.直近のリスク (医療事故調 厚労省第2次試案)。

現在の日本の医療崩壊の大きな原因が、世界に類を見ない医療費抑制政策にあるとはいえ、その深い原因は制度や人間の行動の背後にある思想・コンセプトの問題であり、現実のいやな部分を正視するリアリズムが必要であるというのが氏の主張であり、「安全・安心」神話がむしろ不安を作っている、という中西準子氏の論調と共通するものがある。日本人が日常的に死に接することがなくなり、死の覚悟や不安を引き受けて生き

るといった死生観が日本人から失われたことを指摘する。医師は、医療には限界と不確実性があるだけではなく、危険である場合さえあるということを認知しているのに対して、患者、司法、メディアは、現代医学は万能であり医療行為が適切であれば病気は発見され、治癒し、医療では有害なことは起こりえず、医師や看護師は労働条件がいかに過酷であろうと、誤ってはならないと思っている、という根本的な齟齬が存在すると強調する。このことを下敷きとして、医療への理不尽な攻撃が頻発し、医療現場はとげとげしいものとなった。このような患者との軋轢は、使命感を抱く医師や看護師を失望、疲弊させ、かろうじて耐えてきた激務を放り投げさせ、現場からの立ち去り現象を招いている。このままでは結果的に困るのは医療を必要とする患者とその家族である、という、おそらく多くの医療現場の働らき手の思いを代弁する主張は、医療者内部から初めて小松氏によって発信されたものである。

医療問題を報道するメディアには問題があり、メディアによって作られる「世論」を通じて司法が影響され、したがってメディアは「医療崩壊」現象の促進要因として一定の役割を果たしているという指摘をしている人は多く、氏のメディアに関する意見は注目された。氏によれば、メディアの問題は、1) 主たる関心を情動におき、とりあえず弱者の味方をするという習性、2) 自分の判断を書かないよう訓練され、メディアスクラムといわれるような、記事の機械的反復現象がおきる。3) 専門領域が持つ思考様式と異なり、厳密な認識や科学的な方法を持たないこと。であるとし、マスメディアは報道が人々にもたらす結果を検証する責任がある、としている。科学技術ジャーナリズム現場やそれをめざす学生は、これを攻撃や非難と受け止めず、真摯に反芻、検証していく必要がある。

このような内容の講演に対し、MAJESTyの学生のみならず外部からの参加者、医療関係者などからの多くの活発な質問やコメントが発せられ、内容の非常に充実したセミナーとなった。

(若杉なおみ)



参加者総数 50 人

内訳：

- ・早稲田大学の教員：5 人（10.0%）
- ・早稲田大学の学生/院生：26 人（52.0%）
- ・早稲田大学以外の学生/院生：4 人（8.0%）
- ・公務員/準公務員：2 人（4.0%）
- ・マスメディア関連：2 人（4.0%）
- ・会社員：4 人（8.0%）
- ・専業主婦：1 人（2.0%）
- ・その他：6 人（12.0%）